

登 大 山 (二一)
 今日 選 女 坂
 登 到 大 山 寺
 敬 拜 不 動 尊
 空 海 住 往 事

吹き荒れし
 夜の明け 大山見あぐれば
 かくも萌黄の山と知るなり
 大山に登る (二一)
 今日 は女坂を選び、
 (雨降山) 大山寺に登り到着...
 敬い拝す、(鉄造) 不動明王を...
 空海様は往事(昔時)、
 この寺の住職をなされき...

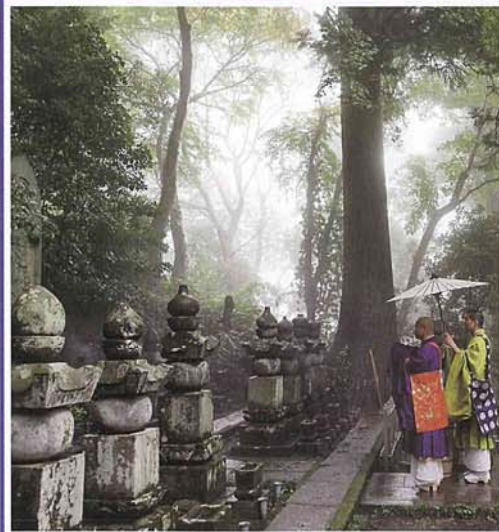
前々号で、仏の御弟子であった周利槃特の話を取り上げました。物覚えが悪かった周利槃特は、一句のお経を授けられ、この言葉信じて、毎日掃除に励み、ついに悟りの境地に達することができましたが、この話には次のような続きがあります。

お経には、「たくさんのお経を読むよりも、一句を聞いて悟る方がまさっている」とか、「いつも意(心)を正しくして余分なことを学ばな」と書かれています。

正しいとは、全く邪念(横道にそれた良くない思い)がなく、無分別(区別して考えない)ということ。形あるものにとらわれるのは「邪」です。正念とは「無心で真実の心」です。それ以外は全て余計なことなのです。深く信じれば、悟りに近づけるでしょう。

(沙石集)

この話によれば、「正」とは「正しい」「間違っ



秋彼岸先師墓地参り
 九月二十三日

「新明題集」実維(あらゆる道を改めて心が素直になる。これは永遠に変わらない)川面に映る満月を眺めながら、時と流れる「正しさ」と、永久に変わらない月の「正しさ」が、秋の景色に美しく融け合っているのを感じています。

(栃木北部教区普濟寺)

折り折りの記 (98)

波多野 重雄

陽の当る窓を覆うや青瓢

暑い日差しを遮る青瓢は風流である。瓢箪は細長く中間がくびれ、中身をくり抜いて酒壺や花器などに作られる。芭蕉(三十八歳)は其角(二十一歳)を伴い対馬守義真公(四十三歳)を訪い、「二物三用の器」を問ふ。翁は「二物(瓢箪)は、仏事用、茶用、日常の三用に使う。つまり、ふるきひさこの器を、持仏の具、茶湯の具、生花の具等に利用する」。芭蕉は「半日のあしらひ、いと興あり」と謝す。

(高尾山健康登山の会々々)

厚木市 荒井 一雄

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(64)

もう衣更えは済ませましたか？季節の移ろいに合わせて、僧侶の衣服も今月から冬衣の装いへと変わりました。二十四節気の「寒露」(十月八日から)を過ぎれば、朝露にも冷たさを感じ始めます。ひんやりとした朝夕の冷気の中でお経を唱えながら、身も心も少しづつ秋の気配に染まってくる気がします。

僅かなる
 庭の小草の
 白露を
 求めて宿る
 秋の夜の月

(西行『山家集』)
 (ほんの少しの小草に置いた夜露を探し求めて、そこに宿っている秋の夜の月光よ)
 秋分を過ぎると、日一日と夜が長くなっていきます。秋の夜長を感じつつ、

澄んだ夜空を見上げれば、円かな月が清かに照り輝いているでしょう。辺りを見渡せば、池の水面にも、月影が映っているかもしれません。

この歌を詠んだ西行法師(一一一八―一二九〇)は、月明かりに誘われるように、庭に出て可憐な草花を探しました。近寄ってみると、小さな葉に露と月とが憩い合っていたのでしよう。それはまるで、夜露が月を逃がすまいと凍らせているかのような煌めきだったのかもしれない。月の光が、自然の隅々にまで行きわたっていることを教えてくれる歌のように感じます。

これまで八回にわたって、「幸せに至るための八つの行い」について書きました。「正見」(正しく真実を見る)、「正思惟」(正しく考える)、「正語」(正しい言葉遣いを心がける)、「正業」(正しい振る舞いをする)、「正命」(正しい生活をする)、「正精進」(正しく励む)、「正念」(正しく真理を追い求める)、「正定」(正しい迷いのない境地に入る)の八つです。これらは仏教で「八正道」と呼ばれる基本的な実践法として説かれていきます。

ちなみに、「正道」の対義語は「不正道」でしょう。お経には、「不正道を捨て、永く悪見を除く」(『華嚴経』)とか、「不正道行き過ぎれば、これ則ち放逸と名づく」(『正法念処経』)などが見えます。「正道」の逆の生活を歩めば「悪見」(誤った考え)や「放逸」(わがまま)の状態に陥ってしまうのかもしれない。では、「正しい道」とは何を指すのでしょうか。

例えば、文化庁から先日発表された「国語に関する世論調査」によれば、「話の」さわり「や

「ぞつとしない」という言い回しを、過半数が本来とは異なる意味で理解しているそうです。こうした結果に、文化庁は「時代の流れとともに本来の意味と違う使われ方が定着する場面も多い。一概に誤りだとは言えない」と語っています。

確かに、言葉は時代とともに変化していきます。「枕草子」や「徒然草」には、当時の言葉の乱れを嘆く一節がありますが、その時代の古語を、現代の



草花見て秋の気配を感じる

人々は日常生活で使っていません。おそらく、この「高尾山報」の私の文章も、何百年か後には古くさくて意味の分からないものとなっている可能性があります。

そう考えれば、例えば「八正道」で説く「正語」(正しい言葉遣い)も、時代とともに移り変わっていくことになるでしょう。では、言葉とともに「正しさ」もまた、日々変化していくものなのでしょうか。